

今回、「非腫瘍性大腸ポリープのすべて」という主題を取り上げた。大腸ポリープとは大腸内の管腔内に突出した隆起性病変の総称で、種々の肉眼形態や組織像を呈する病変を含む。上皮性腫瘍では腺腫、癌、カルチノイド、非上皮性腫瘍では脂肪腫、リンパ管腫などが多い。大腸内視鏡検査で発見されるポリープの約95%は腺腫で、その一部が癌化する。それ故、日常診療では大多数を占める腺腫と早期癌に注意が注がれ、出血や腸閉塞などの臨床症状を呈さない限り、非腫瘍性ポリープに注意が注がれることは少なく、貴重な症例も闇から闇へ消えていき系統的に整理されていないことが多い。

“非腫瘍性大腸ポリープ”としては、主にPeutz-Jeghers型ポリープ、若年性ポリープ、炎症性ポリープ、inflammatory myoglandular polypなどが挙げられるが、“非腫瘍性大腸ポリープ”についての臨床病理学的な特徴を示した特集は、これまで「胃と腸」では組まれたことがない。一方、近年の内視鏡診断学の進歩はめざましく、光学式内視鏡から高画素電子内視鏡の時代になり、さらに拡大観察によるpit pattern診断に加えて、画像強調観察が一般化しており、最近のポリープの内視鏡画像は過去の成書を凌駕するものになっている。

このような背景のもと、今回「胃と腸」で始めて“非腫瘍性大腸ポリープ”をテーマとして取り上げ、山野泰穂、大倉康男、菅井 有、田中信治の4名が企画小委員を担当した。本誌の目次をご覧いただければわかるように、“非腫瘍性大腸ポリープ”を構成する病変についての現状を、進歩

した内視鏡画像診断あるいは病理組織診断学的な鑑別点の両面から整理し、日々の診療で遭遇する“非腫瘍性大腸ポリープ”の診療における即戦力となることを目的とした。

主題は、内視鏡診断と病理診断の両面から、過形成ポリープ、過誤腫性病変、炎症性ポリープについて詳細に解説いただき、若年性ポリープとinflammatory myoglandular polypの病理学的鑑別についても詳細に述べていただいた。そして、非腫瘍性ポリポージスについても解説いただき、主題関連研究としては最近の話題である“過形成ポリープとSSA/P”を取り上げた。これらの論文を一読することで、美しい内視鏡画像や病理組織像と解説から非腫瘍性大腸ポリープの臨床・病理学的な特徴が系統的に整理できたとと思う。さらに、これらを補う目的で、アトラス的にcap polyposis, colonic muco-submucosal elongated polyp, inflammatory fibroid polyp, pyogenic granuloma, inflammatory myoglandular polyp, 肉芽ポリープ, inverted hyperplastic polyp, 隆起型 mucosal prolapse syndromeについて概念、病態、画像所見について簡潔に執筆いただき、内容の充実を図ることができた。

本号は「胃と腸」の通常号ではあるが、“非腫瘍性大腸ポリープ”のまとめた1冊の教科書的内容になっており、読者の日々の診療に貢献するものと信じている。最後に、大変お忙しいなか本号に執筆いただいた多くの先生に感謝の意を表して編集後記としたい。